

ドストエフスキーを読む会 報告 『死の家の記録』

報告者 小山スミレさん

今回も参加者は少数、とりとめもなく出てきた意見から意義深いと感じるものを取りだして掘り下げてみることにする。

発表者は「何が人を生かしているのか？」という根源的なテーマを提示し、それは希望であると論じた。囚人は当然ながら監獄から出られることを夢見るし、終身刑の囚人でさえありえないことを妄想して希望をつなぐ。監獄内の極限状態が描かれているにもかかわらず、この物語を読んでホッとするという意見があった。それは監獄の管理が緩く、それぞれが仕事をして金を稼ぎ、自由に使うことで囚人たちが現在人のように自己実現を目指そうなどとは考えずとも生き生きとした生活ができていたからではないか。ここから人を生かしているのは希望もあるが、労働や金銭も重要ではないかと考えられる。

周知のとおりドストエフスキーは実際に収監された経験を持ち、その経験に基づいて本作は書かれているため、検閲に対する念入りな配慮として本作は「自由思想など持ち合わせていないシベリアの住民」の一人、アレクサンドル・ペトロヴィチ・ゴリヤンチコフによる「狂った頭で書かれた体験記」という設定となっている。（括弧「」内は発表者資料からの引用）ここから序章の人付き合いの悪いゴリヤンチコフと監獄内での精緻な人間観察を綴ったゴリヤンチコフとは同一人物とは思えないという意見が出てきた。そうであるとなると検閲を意識したが故の物語の綻びであるとも読めるが、別の見方もできるだろう。例えば、庶民出身の囚人が多い中に貴族出身である者が入っていくのだから囚人仲間と折り合うために不本意ながら社交的な自分を演じていたのかもしれない。（ラスコーリニコフが囚人仲間から反感を買って殴られたことを想起してほしい）あるいは、徒刑から解放されたときはシャバでの生活に希望をもっていたが、その後の生活に失望して引きこもってしまったのかもしれない。

司会者から提起されたテーマは「貴族と民衆」であった。話題が分散したことでこの問題が十分に議論できたとはいえないが、物語から二つのエピソードが引き合いに出された。一つは有名なお風呂のシーンで、当時の庶民のお風呂といえばサウナで湯気に蒸された後、冷水をかぶるというスタイル、湯や水で体を洗う習慣はなかったらしい。貴族出身の主人公は結局蒸気に蒸されることはせず代わりにペトロフに体を洗ってもらっていた。

もう一つは食事に対する集団抗議の話。主人公が抗議のためにできた列にそうと気づかずに並ぶと「お前なんでここに来た」と拒絶されてしまう。ここでもペトロフが皮肉も交えずに「あなたがどうして私の仲間なのかい」と言っている。これらのエピソードから読み取れるのは貴族出身者と庶民出身者の間には生活面でもアイデンティティの面でも越えがたい断絶があったということだ。

どちらのエピソードにも登場するペトロフという囚人が興味深い。主人公とのやりとりを見る限り純朴で気さくな人物のように思えるが、囚人仲間内での評判は何でもやりかねない恐ろしい人物ということで通っていて主人公も「ある時期が来たら一挙にすべてを片付けてしまう人物」であろうと見ている。現在流にいうと彼はサイコパスか。革命でも起きるような局面においては、知識人は理屈を並べるばかりだから、彼のような人物が実行者となるのだろう、という意見が出た。